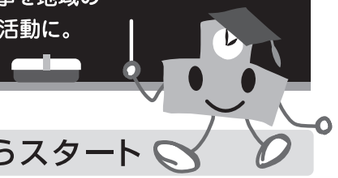
小学校の事例 清田区 平岡小学校

地域の協力を得て、学校にホタルが。ホタルを守る事をとおして、身のまわりの自然を考える。

地域団体の方たちからの声かけで、ホタルの飼育がスタート。
官民一体となって10年間という長期に渡り活動を継続し、
子供たちの環境を守る心を育てる取組。放流式などの行事を地域の
人たちと大々的に行うことで関心を引き、地域に根ざした活動に。



内容 「本物のホタルを見せたい」という思いからスタート

平成22年度で10年目を迎える活動。本校のビオトープは、地域の人々の「自然を取り戻したい」「作られた公園ではなく、自然を生かしたものを」という意識や声がきっかけとなり作られた。ビオトープは、第一と第二ビオトープに分かれ、細い水路でつながっていて、水が循環している。夏は冷たく冬はあたたかいしくみになっている。

清田区には、「清田区ホタルの会」がある。これは、「昔はホタルがもっと多かった。子供たちに少しでも多く、本物のホタルを見せてあげたい」という考えのもと平成9年から活動を続けている会員30名ほどの団体だ。初めは会員から寄付を集め、飼育機械を購入したという。そのホタルの会から、「このビオトープを活かしてホタルを飼ってみないか」と声をかけられ活動が始まった。この地域は初め、年齢層の若い働き盛りの人々のエリアだったのが、今はリタイアをされて学校のために深い見識や技能を発揮したいと考えている方が増えてきている。現在も地域の方をはじめ、区役所・PTAの大きな協力を得て継続されている。

「清田区ホタルの会」から、毎年10月に、ホタルの幼虫（最初は小さく茶色いわらじ虫のような形、サイズ）をバケツに1杯分、贈呈していただく。贈呈式には代表児童18名が参加。ホタルの会の方3名からホタルの生態や水槽を掃除する際の注意点などについてプリントやパネルを使った説明がある。その後、水槽へと放す。こういったことは全て、5、6年生の飼育委員会の仕事。

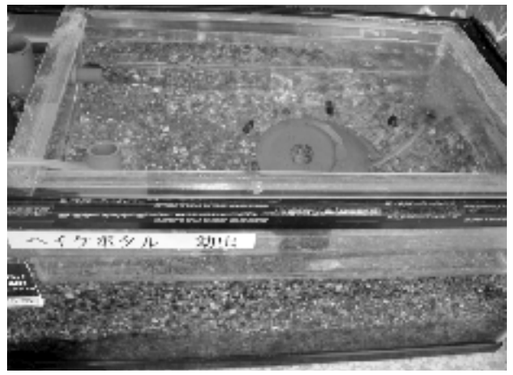
ホタルのエサとなるカワニナは、校内のビオトープに生息しており、さらにこのカワニナがエサとしているキャベツやニンジン、ハクサイは、地域のスーパーマーケットから寄付してもらっている。校内の水槽で5齢虫（約1.3cm）まで育つと、さなぎになる。冬を越え成長を続けたさなぎは、6月には成虫=いわゆる「ホタル」の姿になり、この時期に、区役所裏のビオトープ（高学年）と本校のビオトープ（1年生と特別支援学級）への放流式を行う。夏場には「観賞会」として、参加者を募り、教師や保護者が案内役となって、夜、ホタルが光る姿を楽しんでいる。

ホタルの生態についての説明

ホタルの幼虫を水槽へ

効果 ホタルの飼育を通じて 自然を守る心を育てる

子供たちは、ホタルに対し「自分で育てている」という愛着心が生まれ、「少しでも環境が崩れるとホタルが死んでしまう」ということを学んでいる。ホタルが生きるためのきれいな水について興味をもち、考えることから、環境に対しての意識は高く、「身のまわり、地域を大切にしよう」という気持ちが育っている。また、ホタルの生態について、外部の人や教師に説明ができるほどに詳しくなっている。



ヘイケボタルの幼虫とカワニナ

今後 取組の組織化は明確に

ビオトープ内を循環する水をどう取り込むかが課題であり、悩まされるところである。当初に「10年は機能する」と言われて設置した循環用ポンプに、地下からの火山灰が入ってしまったため実際は5年で修理が必要になり、1回の修理費用が約5万円（人件費、技術料など含）で、年間合計30万円にも上った。

平成22年度は故障していないが今後、循環ポンプが故障した場合には、関係機関に連絡して修理を依頼する方法で対処する予定である。

専門家（本校では「清田区ホタルの会」）から学ぶことや、誰が責任をもって育て、関わっていくかを組織化しておくことが大切。また、子供たちへの意識付けや地域の方々の関心を引き、協力を得るためにも、7月に行われる観賞会は地域へもPRして大切に行っている。

ヘイケボタルの生活史

広げよう つなげよう 環境学習の輪

実施校からメッセージ

総合的な学習の時間の中で他の教科とも結び付け、地域と協力しながらこのホタルを守る活動を維持し、外へ発信していきたいと考えています。ホタルがこの地域に棲みつき、地域の人々に喜んでもらえることが、学校全体の願いです。

環境を守るためには、地域の独自性を生かしつつ、100年単位で先を見据えた取組をしていかなければならないと思っています。